

神津島の

史跡めぐりと

神々にまつわる話



目次

▽流入墓地……………	4
おた、ジュリアの墓……………	4
日蓮宗不受不施派僧の墓……………	5
その他……………	6
▽島の菩提寺瀧響寺……………	6
▽島の鎮守、物忌奈命神社……………	8
▽阿波命神社……………	10
▽微笑を浮かべる閻魔像……………	12
▽ほうそう神様……………	12
▽猿田彦大神と道祖神……………	13
▽秩父山と秩父三十四ヶ所の札所……………	14
▽庵屋の札所……………	16
▽漂着した観世音像を祀るお観音浦の西国札所……………	19
▽御殿山……………	21
▽神津島の歴史の中の黒曜石……………	22
▽神々にまつわる話……………	24
伊豆諸島創生……………	24
水配り神話……………	24
鳩姫物語伝説……………	25
古皇が神津島に行幸された話……………	26
▽古事記への誘い……………	27
伊邪那岐・伊邪那美（イザナキ・イザナミ） の国産み……………	27
伊邪那岐の黄泉の国訪問……………	27
禊祓（みそぎばらえ）……………	28
誓約（うけい）……………	28
天岩戸隠れ……………	29

おしめし

神社と神々とはどのような関係なのか、また天皇家とはどのような係わりが有るのか、興味を抱き、神津島の鎮守、物忌奈（モノイミナ）命・（物忌奈命神社）から先祖探しをしました。

ご存知のとおり物忌奈命の母親は阿波命・（阿波命神社）であり、父親は伊豆諸島を造り出した事代主（コトシロヌシ）命・（三島大社）であります。祖父はなんと稲羽の白兔、大黒さまで知られている大国主（オオクニヌシ）命・（出雲大社）であります。

さらに大国主命から六代遡って伊耶那岐（イザナキ）が亡き妻伊耶那美（イザナミ）を連れ戻そうと黄泉の国を訪れ、現実には直面して地上に逃げ帰り、黄泉の国で汚れた体を清めた際、生まれた三貴子の一人須佐之男（スサノオ）命に辿りつきます。

尚、天皇家の始まりは三貴子の一人天照大御神（アマテラスオオミカミ）・（伊勢神宮）であり、孫の迹迹芸（ニニギ）命が天孫降臨した神であります。（巻末参照）
この冊子が史跡めぐり等のガイドの一助になれば幸いです。

▽流人墓地

かつて大宝律令とか養老律令等古代の法律で、犯罪者の刑罰を定めていますが、その中に死罪に次ぐ刑罰として、流罪があります。

流人と呼ぶ犯罪者は、殆ど期限無しの終身刑で、宮中等での慶事や弔辞で赦免になることがあってもそれは稀なことで、多くはその流刑地で果てることになりました。

江戸時代に入ってから、徳川幕府は、寛保二年(西暦一七四二年)に、お定め書百ヶ条を公布し流刑を遠島と言ひ、その流刑地を伊豆諸島に定め、江戸近辺の犯罪人を島送りにしました。

先ず、遠流の地として八丈島、ここはおもに思

想犯罪者を、中流の地として三宅島、ここはおもに破廉恥罪の者を、近流の地として大島、新島を定めて犯罪者を送り、神津島、御蔵島には島替えと言ひ島で再び罪を犯した者を送り込みましたが、この二つの島は地形も厳しく食料も少ないので再犯とは言え、流人を大勢送ることは無かつたようです。

寛政八年(西暦一七九六年)になると、大島は本土に近過ぎると言うことで流刑者を送らないようになりましたが、その時神津島や御蔵島は流刑地から外されたと言われています。

この制度は明治四年まで続き、明治十一年に島の行政が静岡県から東京府に移された時、島の流

人は許されて出島しましたが、いかにお上の都合とは言え、島の人たちには迷惑千万な制度でした。島に送られた流人の生活は「日常勝手たるべし」とされて、すべて自活する事が原則で見届け品と言う「仕送り」を受ける

一部の流人や、手に職のある者を除いては、その日その日の食を得るために、島の人の仕事の手伝いをして食料を得ていましたが、それでも食料の乏しい島で、島の人と流人が分かち合う食料の余裕があつたのでしょうか。

神津島に送り込まれた流人の数は、良く判っておりません、神津島村役場の「村史年表」の後書きに、「濤響寺の過去帳に流人と思われる者、五十人余とあります。



おた、ジュリアの墓

慶長十七年(西暦一六二二年)徳川幕府のキリシタン禁教令で、改宗を迫られながら固く拒み続け、同年の五月に神津島に流されました。おた、ジュリアの墓は、流人墓地の奥で宝塔印塔よりの墓碑でその前には、櫛が活けられています、島

の人達はジュリアを神と
見ているようです。

昭和三十二年頃、都の
文化調査団が流人墓地を
調査し、おた、ジュリア
の墓であると認定されま
した。

おた、ジュリアは慶長
元年（西暦一五九六年）

豊臣秀吉の朝鮮出兵のお
り、小西行長に救われて
日本に連れてこられ、行
長の妻に養育され、その
影響を受けてキリシタン
を信じ、ジュリアの洗礼
名を受け、その聡明さと
美貌で朝鮮貴族の出自と
言われました。

行長の没落後は徳川家
康の庇護を受け、江戸の
大奥で家康に仕えました
が、家康が秀忠に將軍職
を委譲してからは、家康
の居城の駿府（静岡市）
の大奥に移りました。

キリシタン禁教令を公
布した幕府は、駿府にい
るジュリアに執拗に改宗
を求めますが、それに応
じないので、世の見せし
めとして伊豆網代から神

津島へ流す（大島、新島
経由）ことにしました。

網代への途中、ジュリ
アは駕籠から降り裸足で
山道を歩き始めたので、
警護の者は驚いて駕籠に
戻るように薦めますが、
ジュリアは「私はキリス
トが、イスラエルの首都
エルサレムのゴルゴダの
丘で十字架を背負った故
事を思いそれを分かちあ
いたいのです」と聞き入
りませんでしたが、警護の
者はジュリアは当然許さ
れて、駿府に帰るものと
考え駿府に戻ると必ず咎
められるで、是非駕籠に
と重ねて言いましたが、

ジュリアはそのまま歩き
つづけました。

結局ジュリアは寂しく
神津島でキリシタンの信
仰を守り、流罪の生活を
四〇年程送り六十余歳で
没したとされています。

またこの墓を四〇〇年
もの間、大切に守り続け
てきた家があります。そ
して「この神様にお願
いすると、女性の病気に御
利益があります」と言い
伝えを残しています。ジ
ュリアの養父行長は薬種
商の息子であり、またジ
ュリアは西洋医学を心得
た西洋人宣教師の助手を
務め医療にも詳しくは
なく、また大奥という女
性社会で暮らしたので、
特に婦人科の疾患につ
いて知識があり、島の人達
に大事にされ、没後も墓
を守られたのではないか

と想像できます。



日蓮宗不受不施派僧の墓

流人墓地の入り口から
右側に並ぶ墓石は、日蓮
宗不受不施派の僧侶のも
のと言われています。こ
の派の僧侶は豊臣秀吉が
父母のために、千僧供養
に招きましたが、宗派内
で「この際、権威に逆ら
わないで出席すべきだ」
とする意見と「権威と言
えども出席する事は法華
経の信者以外布施を受け
ず、施さぬとする教義に
悖る」として意見の対立

が有り、結局千僧供養に参加しなかったため「折角の大閣殿下のお招きに応じないとは何事」と、

以後この宗派は弾圧を受けることになり、元禄四年（西暦一六九一年）に

この派の僧侶七人を神津島に流した記録が残されています。けれどもこの墓地にはこの宗派の僧侶とされる墓碑が廿基ありますので、七人の記録以外にも流罪になった僧侶がいたということでしょう。これらの墓碑の中で

一際目立つ五輪の墓碑は明和六年（西暦一七六九年）に三宅島に流され、後再犯の科で神津島に島替えになり、神津島の峠山（今の山下本館の辺り）に住み子供達に読み書きを教えたと言われる「隆賢院日照大徳」の墓碑で

あり、「日照」の入寂後これらの子弟が、この五輪の墓碑を建立したと言われます。

その他

神津島の流人については、正徳四年（西暦一七一四年）に江戸城大奥で起きた、絵島・生島事件で、江戸山村座の歌舞伎役者、生島新五郎が三宅島に流された時、同座の狂言作者中村清五郎他四名が、神津島に流されています。

明和八年（西暦一七七一年）に新島に流されていた流人四人が、島抜けを企てたが仲間の一人が新島役所へ密告したため、捕らえられ、主犯の二人は死罪、途中で企てを断った一人は神津島へ島替え、密告した者は島役所

から褒美として米二俵を頂いたと言い、文化六年（西暦一八〇九年）に新島の流人安五郎と勝蔵が島抜けに失敗して、安五郎は神津島へ、勝蔵は御蔵島へ島替えになっっています。



▽島の菩提寺 濤響寺

島の唯一の菩提寺 濤響寺は浄土宗のお寺で、寛

永十六年（西暦一六三九年）に島の神主と地役人を世襲した松江家の宗祖、石田因幡守の勧請で伊豆下田の海善寺から、休山和尚の派遣を受けて開基され、当時、現在の小学校の正門辺りに萱葺きの草庵を建て「矢割山」と定めました。

宝永の頃（西暦一七〇四年〜一七一〇年）部落大半を焼失するポチ火事で類焼、またその四十年後の下の沢火事で再び全焼したので、第九世専栄上人の時に鈴木宗七家や、数件の家の土地を公有地と交換して、現在の海岸寄りの場所へ移転されました。

これは季節風や火災のことを考えた判断があったものと思いますが、まだその頃は草庵程度のも

のだったようです。

島は享和の年（西暦一八〇一〜一八〇三年）から、かつおの大漁に恵まれたので、文化元年（西暦一八〇四年）の第十三世運智上人の代に、地役人松江右京の発起で、伽藍の建築に着手する事になりました。

この建築は三年の歳月を要し、文化三年（西暦一八〇六年）の八月に上棟式を上げ、その年の暮れにようやく現在の伽藍が落慶しました。

豊漁に恵まれたとは言え、村中総出の労役は大変なものだったと言ひ伝えられていますが、佛の厚い信仰とお寺への敬慕はかえって深まり、老若男女が山での木材の伐採、人肩での運搬、板の挽き割りなど、重い労働を誇

りに念仏を唱えながら心を合わせた作業に、楽しみさえ覚えたものと言われています。

この建築の棟梁は伊豆下田の臼井久八で、屋根は宝形造りで堂内の御本尊を祀る正面祭壇は、一段高くして内陣を設けられていて珍しいものと言われています。

伽藍内外の組物や取り付けられた彫刻物は、二百年経た今でも深みのある色彩を残し、素晴らしい出来栄えに当時の職人達の技術の冴にうなずかされ、特に内陣の組物欄間の臺又（かえるまた）に彫られた人、鳥獣、花など興味深い彫刻物です。本堂内の丸い円柱はきれいに磨かれて、長い歴史の艶が光をはなっています。

本堂の廊下の正面の欄間に、「延命山」と金文字でかかれた偏額は楽翁と呼ばれ、奥州白河（福島

県）の藩主で、後幕政老中の要職に就き、寛政の改革を行った、松平越中守定信の書と言われています。定信が老中の職に就いたのは、天明七年から寛政五年（西暦一七八七年〜一七九三年）までなので、この偏額の揮毫（きこう）は老中職を辞してから以後と考えられます。おそらく島の産物の取引のあつた問屋まわりの寄贈と考えられます。内陣正面の祭壇に祀られている仏像は、開基以来の御本尊の地藏菩薩で、比叡山の恵心院に住居した天台宗の僧侶恵心僧都の作と伝えられています。また脇に並ぶは阿弥陀如

来の像で、「十五夜婆さん」（*）の伝承にまつわるものです。

本堂の裏手から左側一帯は、島の家々の墓地で、狭い通路を挟んで、ビツシリと墓石が並んでいます。島の人達はこの墓地に朝な夕べ四季の花を彩りよく飾り、水を替え線香を上げています。墓地で読経をしている老婆の姿は、島の人の人情の厚さを表していると思っ

ています。またこのお寺の過去帳に「逃げ込み」（*）と言うものがあつたとされていますが「駆け込み」とは少し違うように思えます。

*「十五夜婆さん」の伝承

十五夜の晩に生まれた前田市郎平の婆さんは、

普段から信心深い人でした。ある晩夢の中に仏様が現れ、多幸の浜へ迎えにきてほしいと告げられました。他家に嫁いでいた妹と暗く寂しい山道を提灯で照らしながら多幸の浜へ急ぎました。夜が明けて太陽が水平線から現れると、浜の渚に三体の如来像が漂着していました。姉妹二人は如来のしづくを着物の袖で拭い、そのままお寺の和尚を訪ねて大きいのお寺に、小さいのを姉妹で一体づつ家の本尊佛とすることになりました。十五夜婆さんは十五夜の晩亡くなくなさうです。

*逃げ込みの伝承

濤響寺の古い過去帳に次のような書き込みがあります。

文化文政の頃、仏の心

を入れて佛弟子になる者、連合いに先立たれて尼になる者が多くいましたが、その外に「逃げ込み」と言い、過失で当時の掟に触れた者、失火で山や居室を焼いた者が、その罪の深さを懺悔して、濤響寺の住職の許へ救いを求めてきた者がありました。当然のことながら島役所の詮議は厳しいものです。が、住職が被告に代わって陳謝し、将来を保証する事を誓約して、身柄を濤響寺で引き取り、犯した罪の軽重で一年とか三年の間佛弟子や尼として滅罪と懺悔のために仏に仕える日々を送らせました。その期間が終わると自宅に帰し、公的にも私的にも自由な暮らしを保証する習慣が明治の中頃まで行われていました。

罪人とは言え一旦法衣を纏えば世俗の者では無く、その罪を憎んで人を憎まざるの故事のように、村の人達も黙認し罪の縄を掛けない習わしがあつたと記しています。この逃げ込みについては、当時犯罪者の毎日の管理、管轄する代官所との複雑で数ヶ月も掛かる往復文書のやり取り、面倒な日常のことを考えると、島役所と濤響寺との間に、ある種の默契があつたのではないかと思われます。



▽島の鎮守、物忌奈命

神社

物忌奈命神社は島の村落の北側の高台の台地に、小高い山を背負うように祀られています。

表参道は島の玄関神津島港を見下ろすように六十数段の、急な配段、そ

の下に石造りの大鳥居を、また階段の上にも鳥居を構え、裏参道も二十余段の階段の上にも鳥居を構え、樹齢数百年のタブの大木が鬱蒼と繁る広大な神域を持っています。

この神社は、先の戦争の時、村落が戦災を受けた時、神門と薬師堂を焼き、また拝殿はシロアリの被害を受けましたがそれぞれ復旧し旧の姿を取り戻しました。拝殿の奥にある文化六年（西暦一八〇六年）建築の本殿は、平成十二年（西暦二〇〇〇年）の七月に発生した新島、神津島近海地震により本殿左側の山の斜面が崩落して大量の土砂と倒木のため崩壊してしまいました。（現在は復元している）この本殿は六坪程の御神体を納めた内宮

を覆うように作られていて、覆殿とも言う人がいますが壊滅的な災害にも関わらず、御神体はご無事であったと言います。

御祭神の物忌奈命神が歴史書に現れるのは平安初期の仁明天皇の治世を編纂した続日本後記九の九月二十三日の項で「承和七年（八四〇年）九月伊豆国に言う、賀茂郡に造作の島あり。本の名を上津島と名づく。この島に坐はします阿波の神は三島大社の本后なり。又、物忌奈命は即ち、先の社の御子神なり。」

承和五年（八三八年）七月五日夜火、上津島の左右の海中より出ず。焼炎は野火の如し。十二童子は相接して炬を取り、海に下り火をつく。諸の童子は潮を覆むこと地の

如く、地に入ること水の如し。上の大石は震はし、火をもって焼きほろぼす。」と有ります。

この承和五年の神津島・天上山の噴火は相当大規模なものだったようで、その爆発音は遠く近畿圏でも聞こえたそうです。「十二童子」とは十二の火柱が立ち上がった様子なのでしよう。当時の人々にとつて、それはまさに神の怒りそのものでした。

実はこの神津島の噴火からさかのぼること六年前。朝廷は天長九年（八三二年）に三島大明神（三島大社）とその後の伊古奈比羊（イコナヒメ）神・（伊豆白浜神社）を従五位下の位に祀っていました。神津島の噴火はその仕打ちに怒った正后・阿

波命と御子神・物忌奈命による災異と畏れられたようです。追って承和七年（八四〇年）には阿波命と物忌奈命はそろって従五位下の位に祀られ、その後も常に三島大明神に次ぐ地位を保ってゆくことになりました。

また、平安中期の時代に施行された、律令延喜式の神名帳の中で由緒も正しく崇敬の顕著な神社。全国で二八五座の名神大社に母神の長浜に坐す阿波命神社と共に選ばれ、国弊社としてかつて国の事変の折には伊豆の国司が国弊を捧げ国家安泰を祈られた神社で、廃藩置県後は東京府社となり、府知事が弊帛（へいはく）を捧げる神社でした。

物忌奈命神社の例大祭は毎年七月三十一日の宵

の無形文化財に指定されています。

▽阿波命神社

延喜五年（九〇五年）

醍醐天皇の勅で六十二年

の歳月を経て康保四年

（九六七年）に施行され

た延喜式の神名帳に、物

忌奈神と阿波命神は由緒

も正しくかつ崇敬の篤い

神社として、名神大社と

して官社に指定され、名

神祭の祈りは国司からの

奉幣を受ける、全国で二

八五座に連なる神社です。

この神社の祭神名から、

天太玉（アメノフトダマ）

命（天岩戸の前に集まつ

た神々の一柱、忌部氏の

祖神）の孫、天富（アメ

トミ）命に率いられて阿

波の国（徳島県阿波地方）

へ都落ちした忌部の一族

が東国に渡り、麻、穀を

植え、また太玉神社を建

てた。これが安房（南房

総）神社である。神津島には安房への東上の途次、故あり逗留されたものと言われています。

江戸後期の国学者、平

田篤胤の「古史伝」の伊

豆白浜に鎮座する伊古奈

比羊神社の項に、「事代主

神はまた三島神社に座す、

此の神の後に伊古奈比羊

神と申す、また本后を阿

波命神と申す、また阿羽

羽（アハハ）命の神と言

う、また阿波神と言う、

また天津羽羽（アマツハ

ハ）神という。

この神は天石門別神の

娘で、産みし子は五柱に

坐す、その一柱の名は物

忌奈神と申す、この神は

伊豆の国に坐す神也」と

あります。

「続日本後記」の仁明

紀の巻九、承和七年（八

四〇年）の九月二十三日

宮祭から八月一日と二日に行われ、小学校の子供神輿も繰り出し、年により神輿の渡御が行われま

す。この神輿の渡御については明治二十三年頃にコレラが蔓延した時、島の若者たちが御神体を納めた神輿を担ぎ、村の中を疫病退散を祈りながら駆け巡った故事が神輿渡御の始めとされ、その折の神輿は今も大切に保存されています。

また二日に「かつお釣り神事」が若者たちにより奉納されます。三組もしくはは四組の若者たちは青竹で舟様の物を作りそれに乗って、かつお漁の出漁から漁場での釣上げ、大漁旗を掲げて帰港水揚げ入札に続いてかつおの運搬までを一連の所作で表現したもので、東京都



の条で、承和五年（八三八年）七月五日の神津島の噴火の記録の条の中に、「阿波神は三島大社の本后なり、五子相い生まる」とあります。五柱の神は何処にお祀りしているのでしょうか。

私たちが明神様と呼ぶ物忌奈命神社の祭神と、多幸の榎木ヶ沢に祀る日向神社の祭神「たうないの王子」また祇苗島に祀る祇苗神社の祭神「たでないの王子」は物忌奈命神社明細長に、阿波神の御子神と記載されています。

三島大社の宮司、萩原正夫著の「事代主神御事蹟考」の中に、「伊太豆別神、（御蔵島鎮座）阿豆佐別（アツサワケ）神（利島鎮座）の二柱も阿波神の王子ならん」と記して

います。

阿波の神が鎮座する長浜は、村落から北へ三キロ程離れた海岸で名前が示すように長い磯の浜で、その奥に阿波命神社の鳥居が見られます。

この長浜は「五色浜」と呼ばれていますが、「続日本後紀」には古代の長浜が細かく描写され、海岸には青、赤、黄、黒、白の小石を敷き並べ五色の浜と記されていますが、ここを五色の浜と呼んだのはこの歴史書以来でしょうか。

また境内は両側が切り立つ山間の沢で、その境内を横切つて小川が流れ、そこに架かる橋を渡ると、古代の様式を伝える神殿で旧社殿跡が、東京都の史跡に指定されています。海岸の奥に立つ鳥居や

神殿の前の階段に、扁平な小石に濡れた海砂を盛り供えられています。これは潮花と言ひ大漁の祈願や船出の安全を祈る時、潮花を供える慣わしがあります。

「古代、神は海から来訪すると考えられ、海辺の砂や小石にも神が籠るとされ、それを神に捧げたもので、潮花は神を表しているもの」と言われています。

また神殿の中に大小二個の甕（かめ）が納められていて、夜になるとこの甕は神殿を抜け、海辺から汐水を汲み上げて、阿波神の御用にすると伝えられ、甕の底に汐の香りを残し、床板は潮水で濡れていると伝えてい

ます。都道が長浜海岸に至る

左手に、「三味線松・太鼓松」（現在は次世代の黒松が植栽されている）が並んでいます。この松は久しく訪れのなかつた三島の夫神がお出になるので、阿波神はここで神楽を奏で夫神をもてなしました。

その頃三味線があるはずもなく和琴（わごん）とか神楽笛でお迎えしたものでしょうが、たまの逢瀬をまちわびる女神のいじらしい心が伝わります。

また、仁明紀に戻りますが、承和五年（八三八年）の七月神津島は大噴火を起こし、当時の住民が伊豆半島に避難したと言ひ伝承が南伊豆に残されています。また大和の国（奈良）ではフワフワと漂う動物の毛様の物が降り注ぎ、豊饒（ほうじょう）の兆しと祝つたと

言います。これは石英砂の島の地質と考えると、噴火で噴き上げられたガラス繊維ではと思われま

す。この噴火について朝廷では卜占をたてさせますが、「これは戦火の兆しで、神津島に坐す阿波神が先年三島神の後ろ伊豆白浜神社に位を授けられたが、本後の私はその沙汰を受けない、そのための噴火である」と告げられたので、朝廷は承和七年十月阿波神と物忌奈神に従五位下の冠位を授けました。阿波神の父神は、天石門別（アメノイワトワケ）神と言いつ孫降臨の際に迹迹芸命（ニニギミノコト）に従われた神で天岩戸の前で榊にとり付けた鏡を、天照大御神に差し出した天太玉命のお子神

とされるので、阿波神は天太玉命の孫に、物忌奈神は曾孫にあたることになりま

▽微笑を浮かべる

閻魔像

神津島の表玄関、神津島港から沢尻湾に向かう途中、東京電力発電所前、山下旅館別館の前を過ぎると、切り立つ

岩盤が大きく口を開けている洞窟が、微笑みを浮かべる閻魔を祀る閻魔洞で薄暗い洞窟の中は深くもなく入り口に向けて石積みの祭壇がありそこに五体の石仏が見えます。二体は地藏菩薩像で、次が微笑みを浮かべる閻魔の石仏です。その次もかなり磨耗していますが、これも閻魔の像のよう

で、磨耗の激しい石仏は地藏菩薩の石仏と言われている

ます。また、この祭壇の上の岩の裂け目に蓮華台に乗り剣と宝珠を持つ石仏が祀られています。これは大日如来像と言われている

です。ふつう閻魔像は佛法を護持するため憤怒の相貌をしています。この閻魔像は微笑を湛え優しい雰囲気

を漂わせています。この洞窟に祀られている閻魔像は、その昔島に流された流人が自分の無実の証しとして彫りあげたものとか、また犯した罪の重さを閻魔の像に託して刻んだものとか言われています。詳細は伝えられておりませんが、えられておりません。なお、その時同じ閻魔像を二体刻み、その一体

は菩提寺瀧響寺本堂に祀られています。また閻魔と並ぶ地藏菩薩石像は海難事故の遭難者を悼むためのものと言われている

▽ほうそう神様

です。ほうそう神様は、民家の間に挟まれた小さな社

神津島では、正月の十四日を「花正月」と呼び、家々では椿の小枝に団子を三ケ刺したものと、椿の花のついた小枝を添えて子供たちをほうそう神様へ送りだしました。

子供たちは神社の祠の前に、持ってきた団子と椿の花を供え、「神様ほうそうを三粒だけ下さい」と唱えて拝み、団子は神様から下げその場で食べ

ました。そして、ほうそう神様の裏山からシツチリ、バツチリ（トベラ）の葉のついた小枝を手折って家に持ち帰るのでした。子供たちが家に帰ると、囲炉裏（島ではユルイと言いました）の火を掻き均して、待っていたっていたお年よりが、シツチリ、バツチリの葉を囲炉裏の火に燻べてくれました。

やがてシツチリ、バツチリの葉は、青白い煙を出して激しく燃え上がり、厚い葉肉が幾つも気泡を膨らませそれが音を立てるのであるが、その音をシツチリ、バツチリと言ったものでしょう。また葉肉の膨らみを、ほうそうの発疹と見立てたものでしょう。

シツチリ バツチリ

お山のとんのう

背戸から千石

窓から万石 飛び込め

舞い込め

と、お年寄りが唱える「ほうそう除け」のおまじないを意味は判らなくとも、子供たちは安心したものでした。

ほうそうが神津島に流した記録は特に見当たりにませんが、命を落とした子供たちが大勢いたという話は今も残されていて、治つても顔に醜い傷跡が残るため、女の子たちには恐ろしい病気であったと思われまます。

▽猿田彦大神と

道祖神

道祖神は岐の神（ふなとの神、ちまたの神）または賽の神、道陸神（ど

うろくじん）とも呼ばれ、

村の入り口や道の三叉路に分岐する所に祀られ、村の中に悪霊や悪疫が入り込まないように、道行く人を悪霊から守る神です。

猿田彦大神は、神話の時代に迹迹芸命が天孫降臨の際、日向の国の高千穂の峰までの道案内をした神で、その後五十鈴川の川上に祀られ、容貌魁偉（ようぼうかいい）で鼻が高く背丈は二メートル余もあり、道行く人の守護神とされてきました。が、いつか道祖神と猿田彦大神は同化して行きま

した。

神津島には二十余基の猿田彦大神と道祖神と刻んだ文字碑が道脇に建てられていますが、そこは必ず三叉路で悪霊や悪疫を払う村の守護神であり、

三叉路が意味する生殖、

生産の神として島の人たちの信仰を集めていたと思われまます。そしてこのことは当時の人たちが悪霊とか悪疫に、怯えていたことを表していたことが判ります。

今でも、男女それぞれ厄年になると、猿田彦大神の碑の前にお金を落として置き、拾う人があればそれで厄落としができたと言ひ、女性は櫛などを落として置き、改めて猿田彦大神にお礼のお供え物を上げたと言ひま

す。

神津島ではこの猿田彦大神を「コウセン様」と呼んでいます。盛若の酒造会社の上の御殿山に、コウセン様と呼ぶお堂があります。帝釈天をお祀りしていると言ひま

佛教ではこの帝釈天と青面金剛を、神道では猿田彦を祀りますので、かつては庚申講が存在していたと思われます。そのため庚申の神猿田彦大神大の碑を庚申と呼び、いつか「コウセン様」になったと思われます。また修験道の影響を受けているとも考えられます。

秩父山の旧登山道を登りきった台地に、廿三夜得大勢至菩薩と青面金剛塔と刻まれた二基の文字碑が立っています。

これらを見ても庚申講がかつては島にあったと思えてなりません。庚申信仰は千支の庚(かのえ)申(さる)の夜寝ると、人間の体内にいる三戸虫(さんし)がその人の早死にを望み、夜体内から抜け出し、天帝にその人

の罪を告げ、そのため天帝はその人を早死にさせると言う。中国の道教の教えが、江戸時代に修験道などで説いたので、庚申の夜は寝ないで夜を明かす講が作られたようです。

然し神津島の庚申講がどのようなものであったのかは判りません。

神津島の童歌には
はげやどうろくじん
十三夜の ぼうたもち

というのが有り、猿田彦大神か道祖神に関わる子供たちの行事があった



のではと思われます。

▽秩父山と秩父三十四

ヶ所の札所

村落から多幸湾に行く途中、島の人が赤羽根の峠と呼んでいるところを上がりきる辺の右手に、「秩父山札所登山口」と

書かれた道標が建てられています。そこから細い

山道が、秩父山(標高二八二メートル)の山頂にある観音堂と秩父三十四ヶ所の札所を一ヶ所に集

めてある秩父札所への参道で、昔から自然木の根

や石の階段を山の尾根に取り付けたまま、今もそのままの形で残されている所です。

この参道に入って間もなくの椿の林の中に「南無阿弥陀仏・南無」と刻まれた塔が建てられてい

ますが、それから頂上までの間に木の根株の間とか、土手の石室に納められた地藏の石仏が数ヶ所に祀られ、七観音と言う所はコンクリートの祠に観音と地藏の石仏が数体、昔と変わらぬ表情で立っています。

七観音の先の参道は勾配の強いダラダラ坂になり、手すり代わりに張られているロープにすがり、呼吸を整えながら登り続けるのと、やがて展望台のある尾根の台地に辿り着きます。

丸太組みの展望台に上ると、右下には部落の家並みが広がり、正面の沖合いにはゆったりした恩馳島が、その手前には神津島空港の滑走路と白い建物が見えます。
この台地には「廿三夜

得大勢至菩薩」と「青面

金剛塔」と刻まれた二基の石碑が並び、その他数体の地藏菩薩の石仏が二群に分けて据えられています。この石仏群は海難事故の供養のものとして伝えられ、昭和三十三年の一月に恩馳島で遭難した、神奈川県三崎港の漁船の犠牲者を悼む石碑も、島の漁船の乗組員の名を刻んで建てられています。

この台地から百メートル程尾根を登りつめると、観音堂と札所のある頂上に着きます。そして観音堂は三方を石積みの土手が囲み山の強風を防いでいます。

観音堂は間口も奥行きも二間ぐらいで左手には土間で、座敷の奥の方に観音菩薩や地藏菩薩の石仏が所狭しと並んだ祭壇

があります。

この石仏の内一番古いものと思われる如意輪観世音の台座には、明和元年（西暦一七六四年）八月と刻まれていますので、おおよそ観音堂の開基はその頃と考えられます。

しかしこの夥しい石仏はどうしたものでしょうか。この如意輪観音や十一面観音などは同じ年代ものと思われませんが、同じ祭壇に並ぶ地藏の石仏はかなり新しいもので、おそらく海で犠牲になられた方の供養のためのものと思われまます。

明和元年は今から二百三十余年も前になります。が、この山道を観音の重い石仏を負い、ここに祀らなければならぬ理由や出来事は、一切伝わっておりませんが、暗い光

の中でこれらの石仏は黙したまま並んでいます。

お堂の外へ出ると土手を挟んで札所があります。札所の入口は仕切りの石で区分し、この中を島の人たちは「やしる様」と呼び、特別な聖域としています。

この「やしる様」の中でコの字形に並ぶ石塔は、中央に地藏と思われる石仏二体を置き、それから右側へ秩父一番から十八番それから左側に飛び、十九番から中央に戻り三十三番になり、無番の千手大悲観世音になります。が、秩父札所の結願寺の皆野町の水潜寺の本尊仏は、千手観音であるので、三十四番に間違いないと思います。これらの石塔は高さがまちまちですが、台座を別にしておおよそ

六十センチ程の文字碑で、秩父何番正観世音とか聖観世音とか刻まれている、文字別に見ると

聖観世音が一基

正観世音が一基

聖観世音菩薩が十一基

正観世音菩薩が八基

十一面観世音が二基

十一面観世音菩薩が三基

千手大悲観世音が一基

千手観世音菩薩が三基

如意輪観世音が一基

如意輪観世音菩薩が一基

準胝観世音菩薩が一基

馬頭観世音菩薩が一基で、

合計三十四となります。

ここの石塔の文字を秩父札所の本尊仏と比較しますと、秩父十七番の実正山定林寺の本尊物は十一面観世音ですが、なぜ

ここは千手観世音になっている外、正と聖の違いはあるもののおおむね合

致します。この札所の創建の言い伝えも残されていませんが、札所の入口左側の二十番の石塔の横に、「弘化三年午歳正月吉日」（西暦一八四六年）と刻まれているのを見ると、この年が札所の創建の年とも考えられます。なお、堂内の石仏の台座に刻まれた年より八十年後ですが、秩父山は古くは横山と言ひ、この観音堂も横山観音と呼ばれたと言ひます。

秩父山に変わったのは、札所ができてからのこととされていきますが、この山は秩父札所を設けたのは、当時秩父の札所へ島の人がしばしば出かけたものか、濤響寺の住職の篤い説教に動かされて、観音堂や札所の創建に繋がりが深い信仰を培ったも

のと思われます。

神津島にはこの秩父札所の外に、庵屋の坂東の札所、お観音浦の西国の札所の日本百観音があることになり、伊豆諸島の中でも特異な宗教観と環境があるようです。この秩父札は、死者があり葬礼を終わると七七忌までの間に親戚知己はこの札所に詣で、その証に一人一枚の木の葉を堂内に残してきます。その木の葉三十三枚で一札とし、五札または七札になるまで札所に登り、死者を悼む信仰が生きた形で残されています。



▽庵屋の札所

神津沢沿いの都道の脇の、旧七島信用組合跡地とつばきや釣具店の間の細い昇り道を辿っていくと、やがて家並みが途切れて、小高い丘の麓に突き当たり、コンクリート舗装の道はまた山裾を廻るように都道に降りて行きますが、その突き当た

りから段々畑への細い急勾配の登り道が続いています。このだから道は庵屋へ通じる山道で、登りきった峠を越えると、つばきの林の中の下り道になり、道なりに辿っていくと、沢伝いの水の流れを跨ぐ、丸木の小さな橋が架かっています。それから道は深い沢の中腹を巡るように続いていて、椎の木やタブの木が陽の光を遮るほど茂っていて、沢の谷底から沢水のせせらぎの響きが聞こえますので一瞬深山幽谷に彷彿う心地にさせられます。

庵の建てられているところは、意外なほど明るい台地で、山肌を切り崩して土を盛り、谷川に石積みのお土留めを築いて、台地北側に片寄せて建っ

ている庵は建築後間もない今風の新建材で建てられていて、明るい感じの平屋建てのガラス・サッシュが南向きの部屋の中に、太陽の日射しを暖かく届けています。

建物右側に入口が設けられ、土間に続いて畳み敷きの部屋、その正面に腰高に祭壇が作られ手、ご本尊の釈迦牟尼仏を中心に三尊仏を納めた黒塗りの厨子が置かれ、その下の段には数体の仏像が左右に祀られています。

また、ご本尊を納める厨子の扉の裏側にはこの庵の建替えと厨子の修理をした年月日が墨書されています。

あらためて庵の中を見回しますと、土間近くに囲炉裏が切っておりその後ろの戸棚には、湯飲み

や茶碗などの食器類が仕舞われています。東側の張り出しには、昔スタイルの竈（かまど）が据えられキッチンと整理されています。庵の敷地は以前と比べるとほぼ二倍以上の面積に広げられているようです。

今の建物に改築された以前の古い庵は、トタン葺きのこじんまりしたもので、建物の傷みもひどく柱も傾いて、裏のつばきの幹に寄りかかるような状態でした。そのため島の人たちが大勢で浄財を募りそれで新しく改築されましたが、村落に近いたとはいえ、また山坂を越える山道ですから、資材の運搬に大変な骨折りが多かったと思われます。

庵の境内のそれぞれの場合に船形の光背負う石

仏が数体据えられています。また庵の西側には「坂東卅三所順礼場」と刻んだ石柱が小高く据えられた下に、坂東三三ヶ寺のご本尊仏の名を刻した石塔が、東向きにコの字に並んで建てられています。ここを島の人たちは庵屋の札所と呼び、昔から信仰を集めているところで、言うならば坂東札所の礼拝所ともいうのでしようか。

島の家に死者が出て葬礼が終わると、その参加者は家族・親族と共にこぞってこの札所に詣で、参詣した人三三人で一札の割合で、五札とか七札になるまで何回かここに参詣して札納めをしました。けれどもいつの時からこの札納めは、秩父山の観音堂にある札所に移行

していったようです。この庵屋は忌服明け（ぶつくあけ）の時に大勢で参詣するようです。

さて、今から二百年程前、島の嘉右衛門と言う人は、嫁いで間もない新妻と家族を残して遠く仙台の方へ出稼ぎに行きました。何年か島を留守にして働いていましたがようやくの思いで島に帰りました。

離れて暮らしていた妻に会える喜びに、心躍る思いで島に帰った嘉右衛門を待っていたのは、なかなか帰らない夫を待ちわびた妻が、自害していったという悲しい知らせでした。思えば嫁に迎えてホンの数ヶ月、心を残して島を後に遠い北国で、身を粉にして働いたのは懸命に島の暮らしを支え

てくれる、愛しい妻の苦
労を考えればこそであつ
たと、日々悲嘆に暮れて
いました。

思いあまつた嘉右衛門
はある日瀟響寺の、第十
八世国誉上人の許を訪ね
て、佛弟子として入信帰
依したいと願ひ、許され
て毎日若くして世を去つ
た妻の冥福を祈る日々を
送りましたが、それでも
心の癒えることがありま
せんでした。

やがて嘉右衛門は笈を
まとい坂東八ヶ国三三ヶ
の巡礼の旅を思い立ち、
国誉上人や家族知人の見
送りを受けながら旅立つ
て行きました。

坂東とは相模の国（神
奈川県）、武蔵の国（東京
都・埼玉県）、安房の国・
上総の国・下総の国（千
葉県）、常陸の国（茨城県）、

下野の国（栃木県）・上野
の国（群馬県）の八ヶ国
の総称で、現在の関東地
方のことであり、この国
に散らばる札所寺を巡る
のは現在でも大変なこと
ですが、およそ二〇〇年
余りまえのこと、すべて
徒歩での巡礼の旅ですか
ら想像もつかないほどの
艱難辛苦（かんなんしん
く）があつたことと思わ
れます。

こうして嘉右衛門は亡
き嫁の菩薩を祈って、辛
い巡礼の旅から帰りまし
たが、所有地である舎人
の山の中へ小さな庵を立
て念仏を唱えながら生涯
をここで送つたと言いま
す。

この山は舎人（とねり）
と言う地名なので、それ
から「とのりのあんや」と、呼ばれるようになり

ましたがこれがこの庵屋
の由来だとされています。

いまこの庵のご本尊と
されている、厨子に納め
られている観世音菩薩の
像は嘉右衛門が巡礼の折
りに笈に背負つていた仏
像だと伝えられています。
伝えられているところに
よると、嘉右衛門は天保
三年（西暦一八三二年）
に亡くなつたといわれて
います。

安政五年（西暦一八五
八年）瀟響寺の第一九世
西誉上人の時、島の石田
五郎左衛門や大勢の人達
が、嘉右衛門の坂東札所
巡礼の故事にちなみ、こ
こに坂東三三ヶ所の観音
の名を刻んだ石碑を寄進
しました。

嘉右衛門家では代々こ
の庵を大切に守つてきま
したが、何せ遠くでもあ

り山畑の忙しい時、漁業
のせわしい時は、ついつ
い手が行き届かぬことが
あり、やむなく手近の「せ
んき」にこの庵と札所を
移しました。

その時札所の「坂東卅
三所順礼場」と刻んであ
る石塔を、嘉右衛門家の
婆さんが頭に載せて「せ
んき」まで運んだと言
います。

その後瀟響寺の住職が
「夢の中に嘉右衛門が現
れ、元の場所に帰りたい
と言っていたので元の
「とのり」に移してはど
うかと、家族の者に言わ
れたので再び「とのり」
に庵と札所を移し替えま
した。

その時「坂東卅三所順
礼場」の石塔は、なんと
しても重くて運べないので
そのまま「せんき」に



残されてしまいました。

昭和六〇年頃、「せんき」の庵の跡を住宅地にするため、「この石塔を」とのり「まで運ぶことになりましたが、若者八人で一日がかりでやつと運んだと言います。

その昔、「とのり」から「せんき」まで頭に載せて運んだと言う嘉右衛門の婆さんは大変な力持ちだったのでしょうか。

▽漂着した観世音像を

祀るお観音浦の

西国札所

お観音浦（島の人はおかのうと呼びます）は島の東側の海岸で、少し砂浜もありますがおおよそ転石と岩場の続く、いつも波の荒い磯です。（現在は新島、神津島近海地震による崖崩れにより砂浜が広がっている）

このお観音浦の海岸の長さは七・八〇メートル程もあるでしょうか。その磯の程では清冽な谷水が転石に間を、水音を高めて海岸に注いでいます。磯の左右はそれぞれ切り立つ海蝕崖に挟まれ、その中央は奥深く入り込んだ沢になり、天上

山に続く辺りは切り立っている崖地です。

天上山林道終点の「おれっち」で車を降り、昔の杣道（そまみち）を辿りながら、かなり急勾配の坂道を草木の根を頼りに降りて行くと、海岸に出ます。先の地震以前までは浜に来ると高波に打ち上げられた玉石が、そのまま自然の石垣のように土手を作り、それに萱やつわぶき、あしたばが密生し、そこから灌木がこの台地を区切っていました。

この海岸が、お観音浦と名づけられる元になった観音堂は、この灌木の茂みの奥にあり、茂みを掻き分けて行くと平坦なつばきの林になり、そこから自然石を積み上げた、方形の石囲いが目につき

ます。

観音堂はこの石囲いの片隅に建てられています。お堂の中は小さな土間と囲炉裏が切られ、土間の左側の奥に祭壇が設けられています。屋には花筵（はなむしろ）が敷かれ、小さな卓袱台（ちゃぶだい）と言いい食卓のこと）が囲炉裏の脇に置かれています。

祭壇には木箱の中に金色に輝く二体の、観世音菩薩の像を納めてありますが、人氣も無い湿った部屋の重い空気の中で、糊が切れたので二体とも光背が落ちて、箱の中に入れてあります。

これが観音堂の御本尊仏です。お堂を囲む石囲いの中央に階段があり、その上の小さな台地に島の人が札所と言うコの字

形に石仏を並べた所があります。

コの字に整然と並んでいる石仏の中央には、少し大き目の観世音菩薩像が立ち、それから左へ一番・二番・三番と続き、十七番からは右側に飛んで十八番・十九番・二十番・・・となり、また中央の観世音菩薩像まで、三一番・三二番・三三番となつていきます。それぞれの石仏は舟形の光背を背負う陽刻で、一つ一つの石仏の姿態は彫りも深く、どれも素晴らしく端正な表情は、思わず人を引き付ける魅力を感じます。

これらの石仏は三〇センチ位の台座に据えられています。日差しが届かない所なので、台座から石仏の足下は一面に苔むしています。札所中央の観世音菩薩の裏は三メートル程の岩壁ですが、四〇センチ四方の穴の中に小さい石仏が二体納められています。磨耗しているののでどう言う仏か判りません。

刻まれた石碑が建っています。その裏側に文字が彫られていたようですが、文字も浅い彫りでまた石材は島産のようでどうしても読むことはできません。

この台地の左手にも数体の石仏が祀られています。石室の祠に納められているものや、路地に祀られているものは磨耗が激しく古い歴史を感じさせられます。この石囲いの外に「享保二十年」と読める丸石の石碑があります。これらを見るとこの石囲いの内外に祀られている石仏は、建てられた年代が違うように思えます。

享保二十年は、村役場編の「村史年表」によると、「享保二十年は未曾有の凶年にして、飢餓のた

め二百十一人死亡、内幼きもの百四人」と記されており。

この観音浦の岩山で、飢えのために泣く幼子や年老いた親のために、一握りのあしたばに手を伸ばした若い母親が、足下が崩れてそのまま墜落死したのはこの近くと伝えられているので、この享保二十年の銘のある石碑は、その母親を悼んだものかも知りません。

島では観音浦の札所は生涯で最愛の者を喪った時、一日がかりで此処に詣で亡き人の冥福を祈る場所とされていきますが、荒い海を前に後ろは数百メートルの山肌を木の根草の葉にすがって降りて来なければならず、この頃は詣でる人も少なくなつたようです。この観音

その石仏の幾つかには島の名前が刻まれています。この石仏を寄進したことを表してでもいるのでしょうか。

この札所または観音堂の開基を表した年月とは思えません。札所の入口右手に「開眼西国三十三観世音供養塔」と

堂の御本尊については、次のような伝承が残されています。一つはこの観音浦の山でつばきの実を取っていた島の女が、海岸から届く光で仕事が出来ずやむなく海岸へ降りてみると、波打ち際に観音菩薩の像が流れ着いていたと言うもの。二つはこの浦の沖合いで漁をしていたが渚から届く光芒に目を打たれ、不思議に思い、船を漕ぎ寄せると、観音像が漂着していたと言いきそれぞれお堂を建ててここに祀ったと言います。

底から拾い上げられたと言う伝承は各地に多く有るようです。観音浦の近くを流れる川を越えると、広い台地に玉石が何かを区切るように並べてあるので、昔此処に出家した人が庵を建てて居たと言いますので、案外この観音堂の開基はその辺にあるのかも知れません。

また観音堂近くに祀られている石仏の幾つかは、この観音浦の海で遭難した人を悼んで祀られていると思われます。

いづれにせよこの観音浦は、まさしく「海と信仰」と言う言葉をしみじみ思い出させる雰囲気がある海岸です。



▽御殿山

村の鎮守の森続きに御殿山と呼ぶ所があります。殿山と焼酎「盛若」の醸造工場のある所とその裏山一帯の一面が御殿山です。ここはかつて、代々島の神社の神主と地役人（大正六年まで続き名主の上にあつて事実上の島の統治者）を明治二十五年まで世襲していた松江家の邸宅跡で、門口と呼んだ所が在るのでおそらく島

で唯一軒門を構えていたものでしょう。古老年話聞きますと、年の元旦になると島の家々の主が引きも切らずこの門を潜り、玄関に立って、「ものもう」と大声で奥に呼びかけますと、やがて「どうれ」と答えて家人が現れ年賀を受けたものだというです。

また、「もう」と呼びかけ「とうれ」と、家人が答えたとも聞きました。この松江家の宗祖については、神津島村役場編の「村史年表」では、「永禄年間、松江家の祖石田ありて神に仕え、かつ島政を掌る」と記されています。

永禄のころの島は後北条と言われる小田原北条の支配を受けていたので、この北条家に縁があるので、

か、または鎌倉時代の伊豆の国司工藤家と関係があるものか、石田家は伊豆の国と繋がりが有りそれも島の支配者として送られた古い家柄であることは間違いありません。

また徳川三代將軍家光の時、松江家の祖石田因幡守が神職と地役人を命じられたと、伝えられています。けれども当時の島の行政は、島役所（現在の郷土資料館で旧村役場敷地）で行われたと言いますが、地役人は御殿で執務していたようです。この地役人は島における行政の権限だけではなく、司法の権力も併せて持っていたので、その当主は島の人から「旦那」と呼ばれ畏敬されていました。江戸時代のことを書いた文書に、地役人は無給

で紙・筆・墨代は島費から支出されるとありますが、地位の割には経済的に恵まれてはいなかったようです。なお、江戸時代の後期になると、かつお漁の漁船の水揚げに応じて、かつおを何本と言うように現物で、地役人も配当を受けるようになりましたが、不漁の時は逼迫した生活をしたと言われます。ある時地役人が江戸へ公務で出島することになりました。旅費の工面がつかずやむなく取りやめすることにになりましたが、その時島の人たちは「旦那に恥ずかしい思いをさせる訳にいかない」と、村中で少しづつ持ち寄り出発を見送ったと言いますが、この話は当時の地役人と島の人たちとの関係を良く表し

ている話だと思われます。この御殿と呼ばれた邸宅で、最後の世襲地役人であった松江半之助が、明治十九年に郵便集配請負人に命じられたので、郵便業務を扱いましたが、明治三十三年の暮れ島の家を焼き尽くした大火で、島の歴史を物語る資料や什物共に焼失してしまいました。しかし御殿とは言え誠に質素な、平屋建ての家だったようです。この大火の跡松江家は海岸近くの第六殿（大六天）に、二階建ての邸を新築して移りましたが、この邸も戦火で失ってしまいました。その後この御殿の跡地は、湧水を利用して神津島酒造会社が清酒の醸造を始めましたが、今は焼酎製造を行っておりす。

▽神津島の歴史の中の

黒曜石

神津島の先史時代を考える時、黒曜石の原産地であることを抜きには考えられない。

先土器の時代（二万一千年から一万三千年前）に、東京都練馬区の「比丘尼橋遺跡、調布市野川遺跡、また小金井市の西之台遺跡、瑞穂町の狭山遺跡、神奈川県相模原市の橋本遺跡、大和市の月見野遺跡、静岡県三島市の庚申松遺跡、初音ヶ原遺跡、沼津市の休場遺跡に神津島産黒曜石が運ばれたとされている。

また縄文時代早期の九千年前から縄文晩期の四千年前には、伊豆半島中心に千葉県成田市の空港

や佐倉市の遺跡から神津島産とされる黒曜石が出土している。

東日本の黒曜石の原産地は、信州産、箱根産と神津島産が知られているが、箱根、伊豆産のものは良質のものが少ないと言う。

神津島産の黒曜石については、砂糠崎、恩馳島、長浜の三ヶ所が知られているが、砂糠崎は海上にその露頭が数メートルの黒い幅を見せている。また恩馳島の露頭は海面下で干潮の時にはその一部を見ることが出来る。長浜の黒曜石は砂糠崎と恩馳島との中間の石質であると言われている。特に恩馳島の黒曜石は質も良く研磨した面は、美しい光沢を見せている。また恩馳島周辺の海底には黒

曜石の礫や剥落した塊が一面に敷き詰められている。

明治十四年、坪井正五郎博士は、大島タツの口先土器時代の遺跡から神津島産の黒曜石が出土したので、既に石器の時代に大島と神津島の間に交易があつたと発表された。

また従来北方からの文化移入としていた北部伊豆諸島と、南方系の文化圏内とされていた八丈島の湯の浜、倉輪の遺跡から神津島産の黒曜石が出土したので、伊豆諸島の文化圏が一体化していることが証明できた。

昭和五十三年三月五日付けの読売新聞で、立教大学の鈴木正夫教授は神津島産の黒曜石の年代測定研究結果を発表、黒曜石の表面の光沢が年経る

ことで色が褪せる度合いで、使用された年代を知る「フィッシュン、トラツク法」を確立し、「黒曜石は石器時代の日常に欠かせない利器であつた」とし、神奈川県大和市の月見野遺跡出土の黒曜石は、凡そ一万八千年前に神津島からはこぼれたもの、

また調布市飛行場脇の野川遺跡出土の黒曜石は二万一千年前に、相模原市橋本遺跡出土のものは、二万二千年前のものと分析されている。

ではどうして神津島に良質の黒曜石が在ることが知れたのであろうか。

このことは推測以外手段はないが、多くは漂流による発見であろうと言う意見が多いが、別の見方もある。それは地球の氷河期に相当の海面の低下

があり、神津島から南西の銭洲礁から恩馳島、神津島、式根島それに新島を含む一大島嶼の姿を伊豆半島から眺めた時、

人々は島に行つてみたいという冒険心を駆られたに違いない。然し伊豆半島と島の間は依然として海峡は存在するが現在よりは距離が短かつたであろう。伊豆半島から眺めていた彼らは決死の覚悟で「舟」に乗り渡島を決心したと考えられないでしようか。

伊豆半島を舟様のものを出発した冒険者たちは、海峡を流れる黒潮に乗つて新島辺りに到着し、島の中を巡り住居や食料の調達を行った時、偶然神津島の恩馳島で黒曜石を発見した。

のように考えられている。それは採掘、海上運搬、加工、流通をそれぞれが分担したとしている。おそらく伊豆から複数の人々が黒曜石の搬出に参加したものと思われる。それを裏付けるものに、伊豆河津町の段間遺跡の黒曜石のフレークと黒曜石の塊数十キロの出土が挙げられる。おそらく神津島で採掘しそれを舟様のもので海上を運搬し、河津町の段間で、ナイフ、ヤジリ等に加工されたものと考えられる。

今から二万年前の石器の時代から、縄文晩期の四千年までの間、文明の利器として神津島の

黒曜石が各地に広がった事は事実であろう。



▽神々にまつわる話

伊豆諸島創生

上古の時代、大国主命の子、事代主命（三島大明神）は国土を天孫迹迹芸命に譲り、出雲の国から多数の一族、追従の神々を率いて海路はるばる伊豆の国に渡られて伊

豆の島を焼き出し給う。

伊豆諸島を造りだした神様は、日本の国造りに尽力した大国主命の子、事代主命とされています。事代主命は次々と伊豆諸島を生み出して行きます。造られた順番と各島々の名前は次のとおりです。

第一の島をば「初の島（初島）」と名付け給う。

第二の島をば島々の中程に焼きだし、それに神達集まり給いて詮議有りし島なれば「神集島（かみあつめのしま）」と名付け給えり。

第三の島をば大なる故「大島」と名付け、第四の島は塩の泡を集めわかせ給えば色の白き故に「新島」と名付け、第五の島をば家三つ並びたるに似たりとて「三宅島」と名付け、第六の島は明

神の御倉とおっしゃって

「御蔵島」と名付け、第七の島ははるか沖に有りとして「沖の島（八丈島）」と名付け、第八の島は「小島（八丈小島）」と名付け、第九の島は天狗の鼻のような王鼻（ヲウゴ島）、第十の島をば「十島（利島）」と名付け給う。

伊豆諸島はこのように誕生したと伝えられています。

水配り神話

伊豆諸島創生という大事業を成し終えた事代主命は、各島に后・妃・御子といった神々を配置します。そして神々の会議が神の集まる島（神津島）の天上山、不入ガ沢で行われました。会議の議題は生活に一番大切な水の確保であり会議は粉碎し

たようです。

その昔、伊豆諸島の中心である神津島の天上山に、島々の神々が集まり会議をしました。一番大切な会議は、命の源である「水」をどのように分配するかでしたが、そこで次の朝、先着順に分けることになりました。いよいよ朝になり、一番早く着いたのは御蔵島の神様でした。御蔵島は最も多くの配分を受け、次は新島、三番目は八丈島、四番目は三宅島、五番目は大島でした。こうして水は次々と配られ、最後に寝坊した利島の神様がやってきたときには水はほとんど残っていませんでした。それを見た利島の神様は怒り、わずかに残った水に飛び込んで暴れまわりました。この水

が四方八方に飛び散り、神津島ではいたるところで水が湧き出るようになったと言われています。



鳩姫物語の伝説

箱根芦ノ湖の畔に老漁夫が住んでおり、三人の娘がいたが、ある日あまりの不漁に思わず大漁にしてくれたら娘を一人やってもよいと、独り言を言ったのを湖底の大蛇に

聞かれ、三女をやる約束をさせられてしまう。大蛇は美男の若者に変化して漁をしました。娘はあまりの大漁が続くので不審を抱き恐ろしくなり約束の日、家を逃げ出すことにしました。すると若者は大蛇に変化して三女「佐岐多麻比咩命」(サキタマヒメ)を追いかけました。比咩は白い鳩となつて富士山に逃げたが大蛇は尚も追ってくる。ここから大島に飛び、追つて来る大蛇から遁れて南に飛びようやく式根島の泊の灌木の中に身を隠そうとしました。躑躅の木の枝に降りた瞬間疲労のせいか前のめりになり、片目に枯れ枝が当たり見えなくなつてしまいました。その時の鳩の歌った歌は、幾度か泊りきて式

根島 つつじ有れど花咲くなかれ。と今でもこの躑躅の花は咲かないと言う。大蛇は尚も追ってくるので、神津島北端の返浜に近い鳥居が沢に降りて大蛇の目を逃れるために樹木の中に身を潜めました。この辺は阿波命や事代主命の支配地であったので、事代主命はこの様子を御覧になつて、天羽羽斬(あまのははざり)の太刀(剣)を持つて鳩姫救助に向かいなされた。大蛇は尚も返浜から鳥居が沢に向かつて追つて来たので、鳩姫はつぎ堂のある沢に沿つて天上山に向かい飛び上がった。

事代主命は鳩を池の近くの灌木の繁る中に隠した。やがて追つて来た大

蛇と事代主命との戦いが始まった。大蛇が峰の頂上を上り始めた所を狙い撃ちし真ん中から二つ割にして、更に首の根元を横に払って胴から切り離された。この時白鳩は元の娘に変身し、その名も鳩姫様となられた。

一方切られた大蛇の半分の頭が大島に飛び、半分の頭は八丈島に飛んだ。胴体を切ると残りの尾が三宅島近くの島に飛んだ。是は尾の原島（腹）と言う。又、三ぼんとも言う。神津には胴が落ちたので巻きつくだけで害はしない。是に反して大島と八丈島の蛇は噛み付き有毒であるとされている。

古代天皇が神津島に行幸された話

古皇、天津日高日子波

限建鷦茅不合命（アマツヒコヒコナギサタケウガヤフキアエズノミコト）、産御名（うぶみな）天津宣常之命（アマツノリトコノミコト）は、遠く奥羽の出羽の戸賀に着き大宮を建てて仮寓とした。この行幸を聞いて陸前の斯波（しば）の漁夫三人が大宮に参上して、お祝いの宴に招かれた。

この祝宴の席で天津宣常之命に、ある日の出来事を申し述べた。海狩人たちの話は、ある日三人で魚釣りに舟に乗って海へ出た。釣りをしている間に突然旋風が強く吹き出し、櫓櫂、梶も全く効き目なく、大海原に吹き流されて三日間漂流した。ところが幸いに一つの島を発見し、その島に上陸しました。

この島を見渡すと広く木立が繁り、山腹の所どころに岩穴を掘って人が住んでいた。三人はその人たちに近寄り問いかけてみたが話を通じず、彼らは逆に三人を怪しみ何か言っていると思うと今度は大声で笑い出した。

この島の原住民は五十人余りで、このうち男は二十人余り、女は三十人足らずで、衣類は大魚の皮を裂いた物や木の葉で作った物で体を覆っていた。また食物は魚を獲って食べている。魚を獲るには皆素裸になって海に入り懸命に魚のように泳ぎ回って素手でつかみ獲り、引き裂いて、骨を取り、海藻でその魚肉を巻き、海から汲み揚げた塩水に三日間程漬けて是を食べる。水は岩山の合間

から湧き出る所が多く有った。三人の海狩人はこの様に語ると天津宣常之命は、この島を開いて島の人々を救い、島の名を「嘉ず島」と呼ぶようにと申された。海狩人たちの話を聞いた天津宣常之命は海狩人に道案内するように命じられ、奥羽の国から四十人の臣の神たちを引き連れ神輿を遠津海（遠州灘か）に移して、

伊豆の国の浜に出られた。島が遠望できる場所は伊豆の神巢崎（かむすさき）と言った。此処で天津宣常之命をはじめ神々たちは風待ちをした後、おのおの船に分乗して小島（神子之島）に至り更に遠くの島に到着しました。此の島を「神津集島」（かみづまりしま）と言っていたが今は「神話」と言

っている。

これからさらに三宅島の開拓が行われていく。

▽古事記への誘い

伊邪那岐・伊邪那美

(イザナキ・イザナミ)

の国生み

伊邪那岐・伊邪那美神は天の神様の命を受けて、国造りを始めました。先ずは天の浮橋に立って、まだ混沌としていた地球の表面に棒を入れてかきまわすと、そのしずくが落ちて重なり淤能碁呂島(おのごろしま)という島になります。そこで二人はその島に降りて結婚しました。

そこで、島に柱を一本立て、その回りを回って出会ったところでまず伊

邪那美神が「まあなんて素敵な男性でしょう」と言い、次に伊邪那岐神が「まあなんて素敵な娘だろう」と言いました。そして生まれた子は水蛭子であったため、葦船に乗せて流しました。次に来た子は淡島。これも子の数には入りません。

二人の神は何かおかしいと思ひ、いったん天に戻って神々に相談します。神々は太占(ふとまに)をして占った結果、柱を回って女が先にプロポーズしたのはのがいけなかったのではなからうか。今度は男が先にプロポーズしなさいとアドバイスします。

そこで再び島に降り、結婚式をやり直してこんどは伊邪那岐神が「まあなんて素敵な娘だろう」

と言つてから、伊邪那美神が「まあなんて素敵な男性でしょう」と言いました。そして生まれたのが順に淡路島、伊予之三名島(四国)、隠岐の三つ子島、筑紫の島(九州)、壱岐の島、対馬、佐渡の島、大倭豊秋津島(本州)で、これを大八島国と言います。そして国を産み終えると次に神様を生みます。海の神、山の神、風の神、木の神等次々と神様を生みますが最後の火の神(伽具土神)を生んだ時火傷を負いそれが原因で死んでしまいます。伊邪那岐神は妻の死をなき悲しみ、出雲と伯耆(ほうき)の国境の比婆山に妻の遺骸を葬りました。

伊邪那岐の黄泉の国訪問

愛する妻を失った伊邪那岐は、死者が行くといわれる黄泉の国へ妻を連れ戻しに向かいました。

しかし、伊邪那美はすでに黄泉の国の食べ物を口にしてしまっており、これはもう地上への帰還が不可能であることを意味していた。

それでも諦めきれない伊邪那岐は伊邪那美にかけあつてみようとする。すると、妻は夫に「決して私の姿は見えないように」と念を押して姿を消した。それから伊邪那岐はずつと待っています、なかなか妻は出てきません。そこで待ちくたびれて覗いてしまふのでした。

すると、そこに居た伊邪那美はすっかり姿が変わり果てていて、体には

蛆がたかり、体のあちこちには雷神がついていました。その姿にびつくりした伊邪那岐は慌てて逃げだしてしまいます。

一方、伊邪那岐の裏切りを知った伊邪那美は恥じると同時に夫を恨み、女の悪鬼に夫を捕らえるように命じる。

伊邪那岐は妻が差し向ける追つ手から逃れるために、走りながら黒い髪飾りを投げつけた。すると髪飾りが落ちたところに葡萄の実がなる。伊邪那岐は悪鬼がその葡萄を食べている間に逃げた。

再び悪鬼が追いかけてくると、伊邪那岐は櫛の齒を折って投げつける。すると、今度はそれが筍になった。悪鬼は再びそれに食いついたため、伊邪那岐は時間を稼ぐことに

成功する。

さらに伊邪那美の体についていた雷神が鬼の軍勢を率いて迫ってくると、伊邪那岐は黄泉津比良坂（よもつひらさか）に生えていた桃の木の実を投げつけて撃退する。

そしてついに伊邪那美自らが夫を追いかけてきた。だが、すでに伊邪那岐は大岩で坂の口を塞いでしまっている。悔しさに満ちた伊邪那美は夫に向かつて言う。「仕返しに、あなたの国の人を一日千人ずつ殺します」。伊邪那岐は「それならわたしの国に一日千五百人の子供を産ませることにしよう」と答えた。このため、日本では一日に千五〇〇人の子供が生まれ、一〇〇〇人が亡くなると言う。

襖祓（みそぎばらえ）

さて現世と帰ってきた伊邪那岐命だが、冥界へ行ったままの体では何かと気分が悪い。そこで日向（宮崎県）の橘小門（たちばなのおど）の阿波岐原（あわぎはら）という

ところで行ったのが襖祓である。つまりは清涼な流れの中で、我と我が身を清める儀式のことである。さて、その襖祓の最中に不思議なことが起きた。伊邪那岐命の両目と鼻から神が生まれてきました。その時に左目から生まれたのが天照大御神、右目から生まれたのが月読神、鼻から生まれたのが須佐之男命であった。

伊邪那岐命は天照大御神には天（昼）を、月読神には夜を、そして須佐之男命には海原を、それぞれ

れ治めるように命じたと言う。

彼ら三神は三貴神、または三貴子と呼ばれ、日本の神話を語るうえで欠かせない存在になってゆく。

誓約（うけい）

この誓約は須佐之男命が高天原へ昇った際、武装した天照大御神との間で身の潔白の証明のために行われた儀式のことです。

伊邪那岐命が黄泉の国から帰った時の襖で生まれた天照大御神と、月読神は、父の命令に従い、それぞれ天上と夜の国を治めていた。

一方、海を治めるべく須佐之男命は、務めを放って泣くばかり。その泣き喚く様子に悪い神が騒

ぎ出し、地上では災いが起こつていた。

伊邪那岐命が理由を尋ねると、須佐之男命は母に会いに根の堅洲（かたす）の国へ行きたいと言う。

だが、そんな須佐之男命を父伊邪那岐命は勘当する。それでも意志を貫く須佐之男命は、姉天照大御神に別れを告げようとした。ところが須佐之男命は嵐神、暴風雨神としての性格も持つており、彼が歩くと、台地が揺れ、鳴動した。その荒々しい様子を見た天照大御神は、弟は自分の国を奪いに来たのだと誤解し、問い詰める。須佐之男命は身の潔白を証明しようと互いに子を産むことを提案。

神を産み、天照大御神は須佐之男命の剣によって三柱の女神を産んだ。天照大御神は、生まれた子はその材料の持ち主のものだと判断し、五柱の男神は天照大御神の子、三柱の女神は須佐之男命の子となつた。須佐之男命は女神を産んだことを理由に潔白を宣言した。

勝ち誇つた須佐之男命は、その後天照大御神の田の畦を壊したり、御殿に汚物を散らしたりして暴れた。しまいには、機織場の屋根を破つて血まみれの馬を投げた際、驚き逃げ惑う機織女の一人が命を落としてしまった。

天岩戸隠れ

誓約のあと、乱暴狼藉をはたらく須佐之男命に、天照大御神は手を焼いて

いた。しかし、神に誓つて行つた儀式で負けてしまった身としてはどうしようもなかった。結局現実逃避の行動に出て天岩戸と呼ばれる山中の洞窟に其の身を隠し、大きな岩でその入口を塞いでしまったのである。

このため、世界中は闇に覆われ、人間も獣も草木も、おおよそ生あるものはみな生きる力を失い悪い神が騒ぎ出しました。困り果てた神々は天照大御神を岩戸から連れ出すための策を講じることになった。

ここで活躍するのが思兼神（オモイカネノカミ）である。彼は思慮を巡らせ、太陽をこの世に引き戻すための作戦を練つた。その作戦を実行に移すときがやってきた。神々

は天岩戸の前に桶を多数持ち寄り、そのすべてを伏せて舞台とし、石凝姥神（イシコリドメノカミ）が作つた八咫鏡をメインに祭壇を組み上げる。天目一箇神（アメノヒトツノカミ）が祭りに用いる刀剣類や斧、及び鉄鐸（てつたく）を作り始める。やがて、舞台を取り巻いて神々が集まり、酒宴が始まる。先ず、天太玉神が上の枝には500個の勾玉、中の枝には八咫鏡、下の枝には天羽槌雄神（アメノハヅチオノカミ）の織り上げた倭文の綾織りと呼ばれる美しい幣をつけた天の香具山で取れた榊の大枝を太玉串として捧げ持ち、天児屋根神（アメノコヤノカミ）が太祝詞を唱えた。天照大御神はこれを聞いて喜

んだと言う。天照大御神の偉大さや美しさを目一杯褒め上げて気分をよくして出てきてもらおうという考えだったが、天照大御神は洞窟からまだ出てきません。

そこで、最後の手段である。宴もたけなわとなったとき、天細女神（アメノウズメノカミ）が舞台の上に躍り出て、舞を舞い始める。さらに体が露になるほどに激しく踊りました。会場は大きな歓声と笑いで満ち溢れ、楽しく賑やかな様子は最高潮に達した。

洞窟の中でこの歓声を聞いていた天照大御神も、実は外の様子が気になつて仕方がない。ひととき大きな笑い声が聞こえたとき、思わず入口の大岩を少しずらして外を覗い

てしまいました。これにまさに思兼神が画策した瞬間である。彼の命を待ちかまえていた大手力男神（アメノタジカラオノカミ）が、大岩を力まかせに引き開け、天照大御神の手を取つて引つ張り出した。そして天太玉神が、すかさず洞窟の入口に注連縄（しめなわ）を張つて境界を設け、二度と再びこの中に入ることがありませんように」と大神に願つた。

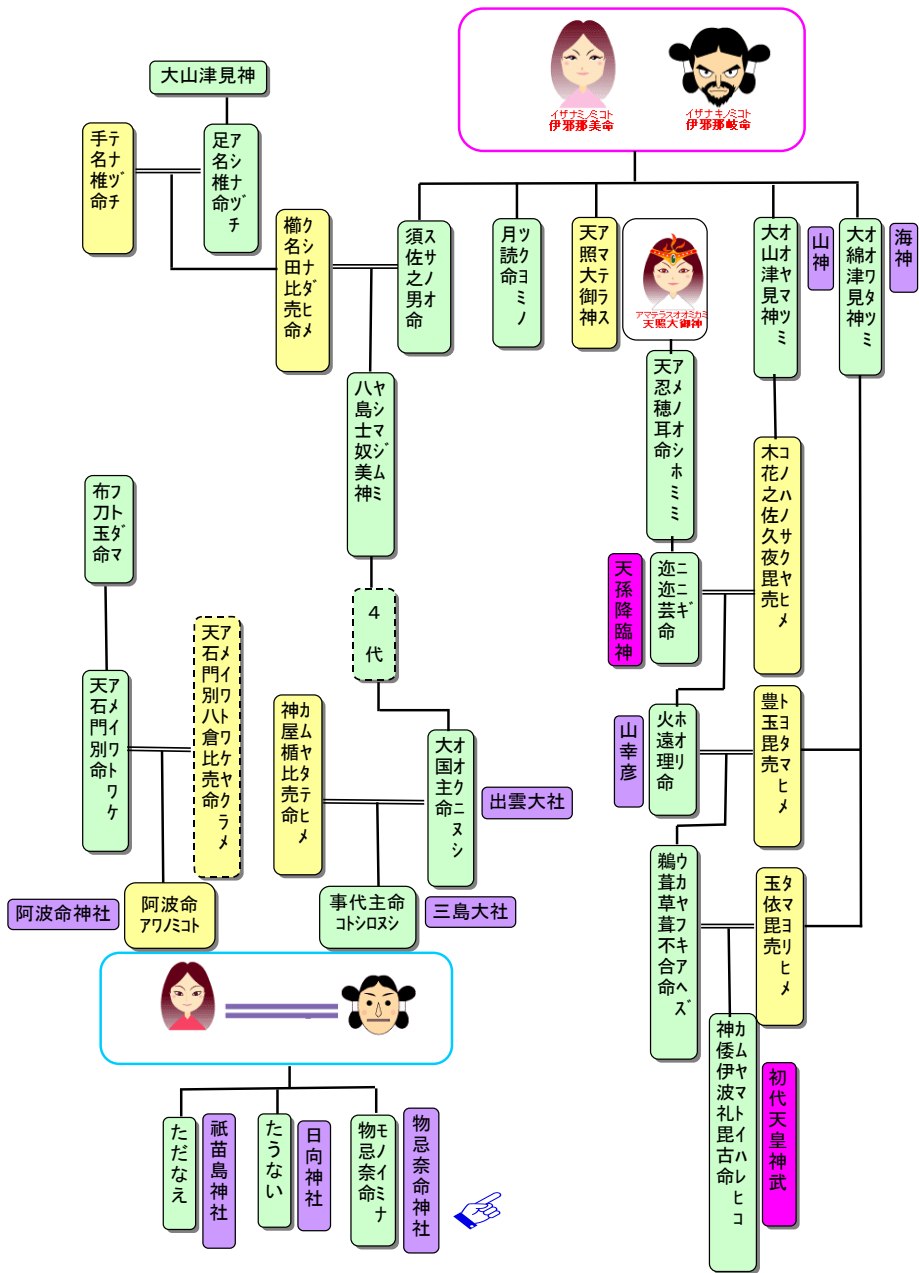
このようにして、世界は光を取り戻し、あらゆる生き物はまた息を吹き返したと言う。

*天岩戸隠れの神は、皆既日食をあらわしているという見方が有力であります。古代の人々は、生

命の根源である太陽が、日中、雲もないのに段々と削れるさまに恐れを抱いたことが想像できます。



神々及び須佐之男命から物忌奈命に至る系譜





神津島の史跡めぐりと神々にまつわる話

2014年12月印刷

著者 梅田勝海

編集 神津島歩歩歩会 中村親夫

神津島村商工会

発行者 神津島村商工会

〒100-0601 東京都神津島村 1761 ☎04992-8-0232

